



「学問は独学」を實踐したマイペース人生

白川 静

漢字学者・漢文学者

明治四十三年（一九一〇）四月九日
平成十八年（二〇〇六）十月三十日

池田知隆 ● ジャーナリスト

とられた。漢文の教師になれば、一生、本を読み続けられる、と思っただのが学者人生の始まりだ。

動機は単純だが、最初の読書目標に「詩経」と「万葉集」の読破を掲げたのがすごい。中国と日本の古代文化に共通する東洋の神髄を探究しようとしたのだ。

そして六十歳で「漢字」（岩波新書）を出すまでは無名だった。「字統」「字訓」「字通」の字書三部作は、立命館大学を去った後の七十三歳から着手し、十三年半後の八十六歳のときに完成。遅咲きどころか、そのことで日本の漢字文化をめぐる膨大な業績が残された。

「志」という字は「士」の下に「心」と書く。この「士」の初めの形は「之」で、足が前に進む形を示している。つまり「心」が「自分はこうしたい」と赴く先のことを意味していると、白川さんの字書「常用字解」（平凡社）

にある。その言葉どおりに人がなるといおうと、マイペースは崩さなかった。

「好きなことを、好きな方法でやり、生前に評価され、うれしい。学問というのは、どんな分野でも自らが勉強するもので、借り物ではできません。その意味で、学問はだれにとっても独学になるはずです」

目標は具体的に

毎日、夜九時に寝て、朝七時に起き、十分に睡眠をとった。頭がさえている午前中、集中して仕事をし、午後は散歩を続けた。趣味は幼いころから親しんだ謡曲で、テープを聞きながら、できるだけ大きな声を出した。相撲や囲碁将棋のTV観戦も好きだった。

長く仕事を続ける秘訣を聞くと、「なるべく具体的に、手の届く範囲で目標をたて、規則的に生活するこ

一生、読書ができる

「散歩の途中、イナバウアーといって背伸びしていた。ちゃめっ気なところもありましたよ」。白川静さんのお別れの会で、娘の津崎史さんがそんな晩年のエピソードを紹介した。トリノ五輪で金メダルをとった荒川静香さんに「わずか数分間の舞で有名になった。一字違いのほくは九十年研究してもあれほど有名にはなれないな」とも言っていたそうだ。一瞬を競うアスリートと息の長い学者の人生とは比較にもならないが、いかにも人間味があふれ、楽しくなる逸話だ。

その人生は「一生、読書が続ける」という志が見事に貫かれている。福井市の貧しい商家に生まれ、小学校卒業後、大阪の代議士宅に住み込んで玄関番をして、手紙のやり取りを手伝っているうちに、漢文の魅力に

と。飛行機も水平飛行すれば、エネルギーを消費しないし、目標があれば、そんなに弱るものじゃない」

平成八年（一九九六）十月六日、仕事一段落つき入院した。早めの休養をとれば、あと二年の命があると机とスタンドを病院に持ち込んだ。一週間たつと「どうも様子が違う」と感じ、二週間後には幻覚が生じ、病室の白い天井のしみをにらんで「原稿にみえる。あれ甲骨文字がみえるや」といった。

「ようけ書いたなあ。もうこれ以上書けない」が最後の言葉で、自分の一生に納得していたという。白川さんはよくこう言っていた。

「志あるを要す
恒あるを要す
識あるを要す」

生きるための志と生活と知恵。ごく自然にそれらを共存させることの大切さを思い知らされる。